インド映画の世界

インド映画の特徴って？

インド映画を見たことがない方に「最近インド映画にハマっていて…」と言うと、返ってくる反応は大体同じです。大体の方が、「踊るやつ?」と聞き返してきます。実際、ほとんどの作品でダンスシーンがあります。インド映画でダンスシーンが多い理由としては、主にインドの代表的な宗教であるヒンドゥー教の文化に多く影響されているため、男女の恋愛をダイレクトに表現することを避けるため、またインドは多言語国家であるため、言語以外の表現方法で多くの観客にストーリーを伝えるためなど、様々な理由が挙げられます。ミュージカルとはまた違い、日本やアメリカの映画でみられる表現とも一味違ったダンスシーンは、インド映画ならではの魅力であり、大きな特徴であると言えます。

　また、インドの古典的な芸術理論では、『ナヴァ・ラサ（九つの感情）』が重要視されています。『ナヴァ・ラサ』とは、恋情、憤激、武勇、憎悪、滑稽、悲愴、奇異、驚愕、平和の九種類で、現代的にわかりやすく言い換えると、順にロマンス、リベンジ、アクション、ヴィラン、コメディ、トラジック、ミステリー、スリル、カタルシスとなります。現代の典型的なインド娯楽映画では、古典芸能で重

視されるこれら九つの要素を一本の作品に全て盛り込もうとしており、そのため上映時間は三時間あって普通というレベルの、我々からしたら大ボリュームな作品がとても多いのです。

　そして、先述した通りインドは多言語国家であり、地域ごとに言語が全く異なります。映画も各地域の言語ごとに作られていて、それぞれの地域にスターがいて、それぞれ違った特徴を持っていることも魅力の一つです。有名な『ボリウッド』という言葉も、インド映画全般でなくムンバイを拠点とするヒンディー語映画のみを指します。他にも、ハイデラバードを拠点とするテルグ語映画、チェンナイを拠点とするタミル語映画など、これら各地域の映画産業が互いに影響を与え合い、助け合いながらインドの映画業界は発展しています。それぞれ特徴があるものの、同じインドという国の映画として、インド国内だけでなく、世界に向けても作品をシェアしていこうという動きが最近は多くみられており、多言語を喋れる俳優による吹き替えや、アカデミー賞やゴールデングローブ賞を受賞したラージャマウリ監督作品『ＲＲＲ』のヒットを皮切りに、日本やアメリカなど他国での映画公開など、インド映画界は盛り上がってきているように思います。そんな今こそ、まだ見たことがないという皆さんにも、インド映画を見ていただけたらと思います。

あらすじ

物語の舞台は一九二十年、イギリス植民地時代のインド。英国領インド帝国総督のスコット・バクストンとその妻キャサリンに、ゴーンド族が暮らす森から少女マッリが連れ去られるシーンから、物語は始まる。連れ去られたマッリを救い出すという使命を背負ったゴーンド族のビームと、内なる大義を秘め英国の警察官となるも、インド人だからという理由で昇進が叶わず憤るラーマ。

ビームは、首都デリーでアクタルという偽名を使い、ムスリムの青年として潜伏していた。ラーマはキャサリンの命令のもと、昇進と大義のためにビームの捜索を開始する。だが川での鉄道事故で少年を助けたことから、二人は互いの素性を知らないまま唯一無二の親友となる。しかしある事件をきっかけに、二人の友情は引き裂かれてしまう。流転する数奇な物語の中、ラーマとビームが選ぶのは友情か、使命か。

見どころ

二人の主人公は、実在したインド独立運動の英雄、アッルーリ・シータラーマ・ラージュとコムラム・ビームをモデルとしており、この作品は、二人がもし出会っていたら？という発想から誕生したフィクションです。同時に作中のラーマには『ラーマーヤナ』のラーマ王子、ビームには『マハーバーラタ』のビーマ王子というインド二大叙事詩の登場人物のイメージも重ねて描かれています。この作品は、インド独立を目指した英雄へのリスペクトとヒンドゥー教の神話のエッセンスを混ぜ合わせて描かれており、インドの宗教、文化、そして歴史など、様々な要素が合わさっている部分が、今作の魅力と言えるでしょう。

RRRの意味とは？

もともとは、S・S・ラージャマウリ監督と、ラーマ役ラーム・チャラン、そしてビーム役N・T・ラーマ・ラオ・ジュニアの名前にあるRを三つ重ねた仮題でしたが、ファンの間で好評を博したため、そのまま本題名となりました。英語では蜂起（Rise）、咆哮（Roar）、反乱（Revolt）の頭文字としていますが、インド国内の言語では怒り、戦争、血を意味するRの入ったそれぞれの単語が、サブタイトルとして使われています。

ラージャマウリ監督ともともと親交のあった二人のスターとの友情、そして植民地時代のインド国民の感情が見事に表現された、まさに本作にぴったりのタイトルなのです。

本作はアカデミー賞歌曲賞受賞という、インド映画初の快挙を成し遂げた偉大な作品です。世界規模の上映も視野に入れていたためタイトルこそ英語の頭文字ですが、ぜひ元言語のテルグ語で、そしてできれば、より作品に没入できる映画館での鑑賞を強くお勧めします。

王を称えよ！ バーフバリ

伝説誕生・王の凱旋

あらすじ

　ある高貴な女性の命と引き換えに川から助けられた主人公シヴドゥは逞しく成長するが、村を流れる滝の上の世界に興味を抱く。ある日滝の頂上へ辿り着いた彼は、美しい女戦士アヴァンティカと運命的な恋に落ちる。彼女は暴君バラーラデーヴァが統治する王国と戦っており、シヴドゥも自ら戦士として王国に乗り込む。そこには幽閉された実の母デーヴァセーナの存在と、自らが王国の王子バーフバリであるという真実があった。父の家臣であったカッタッパから父アマレンドラと母デーヴァセーナの過去と悲劇を聞いたシヴドゥは、二人の息子としてマヘンドラ・バーフバリを名乗り、父から王位と命を奪い、母を鎖に繋いだ自らの叔父・バラーラデーヴァに戦いを挑む。

　古代インドの王国を舞台に、父アマレンドラ・バーフバリから息子マヘンドラ・バーフバリに受け継がれていく運命の戦いを描いた、世界でも大ヒットした超大作。

見どころ

　この作品の見どころは、何と言っても圧倒的なスケールで描かれる古代インドの王国と物語、登場人物たちです。この作品に限らず、インド映画は俳優をとにかくかっこよく、女優をとにかく美しく撮ることにこだわっているように見えるのですが、本作においてはそれがバーフバリの王としての偉大な存在感、デーヴァセーナの燃えるような復讐心、国母シヴァガミの威厳など、俳優陣の焼き付くような演技をよりダイレクトに見る側に伝えてくれています。派手なアクションの中にも複雑な人間関係や王位を巡る策略などが描かれており、前編後編あるものの、最初から最後まで飽きずに見ることができることと思います。

　なかでも私のお気に入りのシーンは、アマレンドラとデーヴァセーナの息ぴったりの戦闘シーンです。右のページにもあるように弓矢を使うのですが、戦闘シーンのはずなのに舞っているかのように美しく、二人の強さと愛を感じられる素晴らしいシーンです。

ラージャマウリ監督作品の女性たち

　S・S・ラージャマウリ監督の作品における女性たちは、本作のシヴァガミやデーヴァセーナだけに限らず、強くて賢く、美しいキャラクターばかりです。監督は人生において母親や義姉、妻などの女性から大きな影響を受けているとインタビューで語っています。単なるフェミニズムでなく、主人公たちが強くある物語の中にこそ、彼女のような女性の存在は輝いているし、見ていてとても憧れる。ただのド派手映画ではない、バーフバリをはじめラージャマウリ監督作品を、ぜひ楽しんでもらいたいです。

あらすじ

物語の舞台は、一九八〇年代半ばのアーンドラ・プラデーシュ州中部、ゴーダーヴァリ川沿岸の田園地帯、ランガスタラム村。チッティ・バーブは、モーターを使って田畑に水を送り込むことを生業にする労働者。難聴で他人の声がよく聞き取れない障害を持っているが、さほど気にせずに毎日を楽しく暮らしている。彼は近所に住むラーマラクシュミに一目惚れをし、調子はずれな求愛をする。

一方で、彼の暮らすランガスタラム村は、プレジデントを自称する金貸し兼地主によって牛耳られていた。チッティ・バーブの兄で、中東ドバイで働いているクマール・バーブは、帰省した際にプレジデントが好き放題にする故郷の村の有様を見て心を痛め、州会議員ダクシナ・ムールティの力添えで村長選挙に立候補し、プレジデントの圧政から村人たちを救おうと思い立つ。しかしプレジデントの恐ろしい妨害が、バーブ兄弟を待ち受けていた。

見どころ

本作の見どころは、一見楽しそうなポスターやダンスシーンと、本編の内容のギャップにあると思います。YouTubeなどで公開されている本作の予告映像内のセリフや、劇中のダンスシーン映像など、実際に作品を見ると意味合いがかなり変わってくるのです。特に、劇中歌『ランガ ランガ ランガスタラーナ』の歌詞であり、キャッチコピーとしても使われている「この世は芝居の舞台（ランガスタラム）俺たちゃみんな人形さ」というフレーズは、この作品をよく表しているようです。どういった意味合いのある歌なのかは、ぜひ実際に作品を見て、理解していただけたらと思います。

また、先述した劇中歌『ランガ ランガ ランガスタラーナ』のダンスシーンも、大きな見どころの一つです。チッティとバックダンサーたちが砂を巻き上げながら踊る息の合った激しいダンスはエネルギッシュで、耳に残る民族的な音楽は、クセになること間違いなしです。歌詞にも注目しながら、ぜひ見てみてください。

主演ラーム・チャランとランガスタラム

本作は大ヒット作RRRで主演を務め、インド国内でも『メガパワースター』と呼ばれるラーム・チャランがスターのオーラを封印し、聴覚障害を患うお調子者の青年、チッティ・バーブを好演しています。

ラーム・チャラン自らが「役者人生の転換点」、「これまでの出演作のなかでも最高の演技ができた」と語るほど、脚本、演出、俳優陣の演技、全てが全力で制作されたランガスタラム。この作品は、インドだけでなく、この世の社会全ての現実に根ざした内容にも見え、衝撃的で、人間の恐ろしさを感じさせながらも、素晴らしい作品です。

また、インドのカースト制度や女性の扱いなどについても調べてみると、ストーリーや登場人物たちについての理解が深まることと思います。

世界はリズムであふれてる。

響け！情熱のムリダンガム

公開：2018 年
言語：タミル語
監督：ラージーヴ・メーナン
音楽：A・R・ラフマーン

あらすじ

インド・タミルナードゥ州都のチェンナイ。南インド伝統音楽（カルナータカ音楽）で演奏される打楽器・ムリダンガム職人を父に持つピーターは、映画スター・ヴィジャイ激推しの学生。ところがある日父の作ったムリダンガムを巨匠ヴェンブ・アイヤルが演奏するのを目の当たりにし、自分もその奏者になりたいという衝動が起きる。その瞬間から、カーストによる差別、伝統音楽と映画・テレビ業界との軋轢、伝統芸能の承継、世代間の意見の相違など、様々な障壁がピーターに降りかかっていく。

　巨匠に弟子入りを直訴するも、身分を理由に門前払い。やっとの思いで入門を果たし、伝統に厳格な師匠との距離を徐々に縮めるも、兄弟子たちの嫌がらせや裏切り。ついに警察沙汰になり、破門になってしまう。師匠をも失い絶望するピーターに、ガールフレンドのサラはある言葉をかけ、ピーターの背中を押す。

見どころ

本作を見る上で注目すべき点は、A・R・ラフマーンによる音楽だと私は思っています。ラフマーンは一九九八年に日本で公開され大ヒットした『ムトゥ 踊るマハラジャ』の音楽を担当し、イギリス映画『スラムドッグ$ミリオネア』ではゴールデングローブ賞作曲賞、アカデミー賞作曲、歌曲賞などを受賞した世界的な作曲家。本作の舞台と同じチェンナイ出身で南インドの古典音楽にも造詣が深く、本作での彼の音楽は、主人公ピーターの感情に寄り添うかのように、時には激しく力強く、時には優しく流れるような、素晴らしい楽曲ばかりです。

　深刻なカースト問題などを扱いながらも、随所を彩る音楽によってとても楽しめる映画になっていて、この作品をきっかけに、教科書の文章でしか知らなかったインドのカースト制度と、それがまだ影響力を持っているということについて、そしてインドの古典音楽の魅力について考えるようになった映画ファンも、多いのではないでしょうか。

インド料理店が、インド映画を配給

実はこの映画は、東京都荒川区にある南インド料理店なんどりが、クラウドファンディングを経て日本での配給に至った経緯があります。

　作中でのピーターはタミルのスター俳優・ヴィジャイの映画オタクですが、映画ばかりの彼が惹かれたのが、ムリダンガムという打楽器。困難をもぶち壊すほどのムリダンガムへの熱意は、まさに『推す』ということなのでしょう。ピーターがアイヤルのムリダンガムに心を揺さぶられたように、ピーターの熱意が見る人の心を動かし、そして本作を『推す』人々によって日本で再公開された、究極の推し活映画である、と言えるのです。パンフレットや日本版予告映像も本作への愛が詰まっており、読み応え・見応え抜群で、デザインも素敵です。インド古典音楽に興味が湧いたら、ぜひ。

K.G.F.
: CHAPTER 1, 2

「世界が、俺の縄張りだ」

公開：2018 年
言語：カンナダ語
監督：プラシャーント・ニール
音楽：ラビ・バスルール

あらすじ

ジャーナリストのアナンド・インガラギは、コーラーラ金鉱に君臨したギャングについて記した書籍『エル・ドラド』を出版するが、インド政府によって発禁処分を受けてしまう。時が流れた二〇一八年、テレビ局が情報を聞きつけ、レポーターのディーパ・ヘグデがアナンドに取材を申し込む。取材に応じたアナンドは、コーラーラ金鉱地区の歴史と、金鉱を支配したギャング『ロッキー』について語り始める。

ロッキーは母シャンタマに育てられるが、十歳の時に母と死別する。極貧の中で死んだ母の「死ぬ時は支配者であれ。富を手にして死ね」という言葉を胸に、ロッキーはボンベイに移住する。マフィアの世界で成り上がっていく。やがて金鉱を支配下に置いたロッキーは、新たな金鉱を発見し事業を拡大していくが、ロッキーの前に強大な敵が現れる。負傷し窮地に追い込まれたロッキーは、金鉱を守り、生き残ることができるのか。

見どころ

この作品の見どころは、主人公ロッキーのド派手で残虐なまでのアクションシーンです。作中の「暴力が俺を愛してくる」というロッキーのセリフは、まさに彼を表すセリフだと思います。このセリフの通り、本作は肉弾戦をはじめ銃撃戦などアクション（暴力）シーンが満載で、かつ映像に合わせて流れる音楽もとてもかっこよく、見ていてとてもテンションの上がる作品になっています。

ロッキーを演じたのは、『ロッキングスター』ヤシュ。もともとロマンスやコメディ映画で人気を得ていた俳優だったため、本作のロッキーのような荒々しくてマッチョな役は珍しく、ファンにとってはたまらない作品となっていることと思います。

ロッキングスター・ヤシュとカンナダ語映画

本作は『サンダルウッド』と呼ばれるカンナダ語映画。実はカンナダ映画は、ヒンディー、テルグ、タミルと比べると地味なイメージを持たれやすく、全国的にヒットするような大型作品はあまり作られませんでした。しかし、本作の素晴らしさを見抜いたラージャマウリ監督の手助けもあり、本作がインド全国で公開されると、RRRを抜いて二〇二二年トップの興行収入とヒットを叩き出したのです。これはカンナダ語映画史上初の大記録で、本作がいかに特別な作品かがわかると思います。

主演のヤシュは、ベンガルールを訪れていたラージャマウリ監督に二分でいいのでと頼み込んで本作のラッシュシーンを見せ、多言語展開の協力を取り付けるなど、俳優の職能を超えた部分でも精力的に働いたそうです。本作は構想から制作まで約十年あまりの時間をかけて作られ、かかった資金も莫大。主要キャストやたくさんのエキストラなど、制作陣が厳しい撮影環境の中作り上げた傑作です。カンナダ語映画界に見事新しい風を吹き込んだ本作。大迫力のアクションと重厚な物語を、ぜひ見ていただきたい。

気になったら劇場へ！

インド映画のパンフレットは、インド文化や宗教について詳しい方からの寄稿や分かりやすい解説、出演俳優たちのキャリアについてなど、作品をさらに楽しめる内容となっています。装丁なども凝っていたり、映画への愛が溢れているパンフレットが多く、ぜひ劇場で見かけたら手に取ってもらいたいです。

　インド映画はぜひ映画館で鑑賞してもらいたいのですが、機会を逃したらもう見れないかもしれない、ということを頭に入れておいてください。まだまだ上映館数も少なく、すぐに上映終了となってしまうこともあります。そのため気になる作品が上映されていたら、迷わず見に行くことをお勧めします。

▲左から「K.G.F.」、「響け！情熱のムリダンガム」、「RRR」のパンフレット。

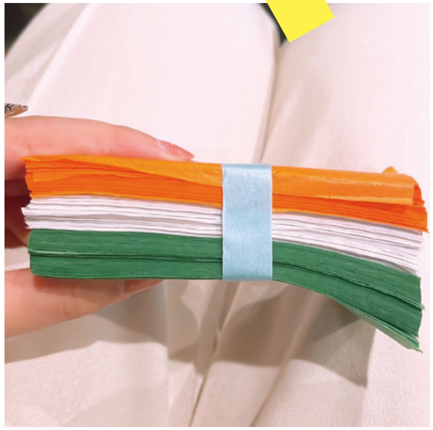
マサラ上映って？

シーンに合わせて踊ったり歓声を上げたり、また紙吹雪を舞わせたりクラッカーを鳴らしたり…というような鑑賞スタイルのこと（もちろんルールはあります。）を指します。南インドのタミルナードゥ州では、実際にこのスタイルでの上映が行われています。ダンスシーンではヒロインの衣装の色に合わせた紙吹雪を投げたり、ロマンチックなシーンではハートの形の紙吹雪が舞わせたりなど、紙吹雪を投げるのがとてもうまい『プロ』の方がいらっしゃることも。

　観客たちが一体となって盛り上がりながらエンドロールまで映画を楽しむことができ、SNS上でのやりとりだけでなく、実際に会ってファン同士で交流をしやすいという点は、インド映画をより楽しめる良いスパイスとなっています。

▼マサラ上映後の劇場の様子。足が埋もれるほどの紙吹雪の量。

▼いただいた紙吹雪。隣の方にお菓子や手作りのステッカーをもらうことも。



「インド映画の世界」

著者　北山 彩也香
発行日　2023.12.21.